

余と万年筆

夏目漱石

青空文庫

此間魯庵君ろあんに会つた時、丸善の店で一日に万年筆が何本位売れるだろうと尋ねたら、魯庵君は多い時は百本位出るそうだと答えた。夫それでは一本の万年筆がどの位長く使えるだろうと聞いたたら、此間横浜のもので、ペンはまだ可なりだが、軸じくが減つたから軸丈だけ易かえて呉くれと云つて持つて来たのがあるが、此人は十三年前に一本買ったぎりで、其一本を今日まで絶えず使用していたのだというから、是これがまあ一番長い例らしいと話した。して見ると普通の場合ではいくら残酷に使つても大抵六七年の保証は付けられるのが、一般の万年筆の運命らしい。一本で夫それほど程長く使えるものが日に百本も出ると云えば万年筆を需用する人の範囲は非常な勢を

以て広がりつつあると見ても満更見当違いの観察とも云われない様である。尤も多し中には万年筆道楽という様な人があつて、一本を使い切らないうちに飽が来て、又新しいのを手に入れたくなり、之を手に入れて少時すると、又種類の違つた別のものが欲しくなるといった風に、夫から夫へと各種のペンや軸を試みて嬉しがるそうだが、是は今の日本に沢山あり得る道楽とも思えない。西洋では煙管に好みを有つて、大小長短色々取り交ぜた一組を綺麗に暖炉の上などに並べて愉快がる人がある。単に蒐集狂という点から見れば、此煙管を飾る人も、盃を寄せる人も、瓢箪を溜める人も、皆同じ興味に駆られるので、同種類のものうちで、素人に分らない様な微妙な差別を鋭敏に感じ

分ける比較力の優秀を愛するに過ぎない。万年筆狂も性質から云えば、多少実用に近い点で、以上と区別の出来ない事もないが、強いて無くても済むものを五つも六つも取り揃えるのだから今挙げた種類の蒐集狂と大した変りのある筈がない。ただ其数に至つては、少なくとも目下の日本の状態では、西洋の煙管パイプ氣狂の十分の一も無かろうと思う。だから丸善で売れる一日に百本の万年筆の九十九本迄は、尋常の人間の必要に逼せまられて机きじょう上若くはポケット内に備え付ける実用品と見て差支さしつかえあるまい。して見ると、万年筆が輸入されてから今日迄に既に何年を経過したか分らないが、兎とに角高価かくの割には大変需要の多いものになりつつあるのは争べかう可べからざる事実の様である。

万年筆の最上等になると一本で三百円もするのがあるとかいう話である。丸善へ取り寄せてあるのでも既に六十五円とかいう高価なものがあるとか聞いた。固もとより一般の需要は十円内外の低ていれ廉んな種類に限られているのだろうが、夫それにしても、一つ一銭のペンや一本三銭の水筆に比べると何百倍という高価に当るのだから、それが日に百本も売れる以上は、我々の購買力が此の便利ではあるが贅ぜいたく沢品ひんと認めなければならぬものを愛あい玩かんするに適當な位進んで来たのか、又は座右ざゆうに欠くべからざる必要品として価の廉不廉に拘かかわらず重ちよう宝ほうがられるのか何方どちらかでなければならぬ。然しかし今其原因を一つに片付けるのは愚ぐの至として、又事実の許す如く、しばらく両方の因数が相合して此需要を引き起し

たとして、余はとくに余の見地から見て、後者の方に重きを置きたいのである。

自白すると余は万年筆に余り深い縁故もなければ、又人に講釈する程に精通していない素人しろうとなのである。始めて万年筆を用い出してから僅かわず三四年にしかならないのでも親しみの薄い事は明らかに分る。尤も十二年前に洋行するとき親戚のものが餞別せんべつとして一本呉れたが、夫はまだ使わないうちに船のなかで器械体操の真似まねをしてすぐ壊して仕舞しまった。夫から外国にいる間は常にペンを使つて事を足していたし、帰つてから原稿を書かなくてはならない境遇に置かれても、下手な字をペンでがしがし書いて済ましていた。それで三四年前になつて何故なぜ万年筆に改めようと急に

思い立つたか、其理由は今一寸ちよつと思い出せないが、第一に便利という実際のな動機に支配されたのは事實に違ない。万年筆に就つて何等の経験もない余は其時丸善からペリカンと称するのを二本買って帰った。そうして夫それをいまだに用いているのである。が、不幸にして余のペリカンに対する感想は甚はなはだ宜よろしくなかつた。ペリカンは余の要求しないのに印インキ氣むやみを無暗むやみにぼたぼた原稿紙の上へ落したり、又は是非墨色を出して貰もらわなければ済すまない時、頑がんとして要求を拒絶したり、随分持主を虐待した。尤もつとも持主たる余の方でもペリカンを厚遇しなかつたかも知れない。無精ぶしような余は印インキ氣むやみがなくなくなると、勝手次第に机の上にある何どんな印氣インキでも構わずにペリカンの腹の中へ注つぎ込んだ。又ブリュー・ブラツクの性来きらい嫌

な余は、わざわざセピヤ色の墨を買つて来て、遠慮なくペリカンの口を割つて吞のました。其上無経験な余は如何いかにペリカンを取り扱あうべきかを解しなかつた。現にペリカンが如何に出洩つても、余は未いまだかつて彼を洗濯した試ためしがなかつた。夫それでペリカンの方でも半なかば余に愛想あいそを尽かし、余の方でも半ばペリカンを見限みかぎつて、此正月「彼岸過迄ひがんとすぎまで」を筆するときは一ひと時代退歩して、ペンとそうしてペン軸じくの旧弊な昔に逆戻りをした。其時余は始めて離別した第一の細君を後から懐なつかしく思う如く、一いつたん旦見棄みすてたペリカンに未練の残つている事を発見したのである。唯ただのペンを用いたした余は、印氣インキの切れる度たびごと毎すみつに墨壺ぼのなかへ筆を浸ひたして新たに書き始める煩わづらわしさに堪たえなかつた。幸にして余の原稿そが夫

程れほどの手数が省はぶけたとて早く出来上る性質のものでもなし、又ペンにすれば余の好むセピア色で自由に原稿紙を彩いろどる事が出来るので、まあ「彼岸過迄」の完結迄はペンで押し通す積つもりでいたが、其決心の底には何どうしても多少の負惜しみが籠こもっていた様である。余の如く機械的の便利には夫程それほど重きを置く必要のない原稿ばかり書いているものですら、又買い損なつたか、使い損なつたため、万年筆には多少手古擦てこずつているものですら、愈いよいよ万年筆を全廃するとなると此位の不便を感じる所をもつて見ると、其他の人が如何いかにに拘かかわらず、毛筆を棄すてペンを棄すてて此方こちらに向うのは向う必要があるからで、財力ある貴公子や道楽息子どうらくむすこの玩具に都合のいい贅ぜいたく沢品たくひんだから売れるのではあるまい。

万年筆の丸善に於る需要をそう解釈した余は、各種の万年筆の比較研究やら、一々の利害得失やらに就て一言の意見を述べる事の出来ないのを大いに時勢後れの如くに恥じた。酒呑が酒を解する如く、筆を執る人が万年筆を解しなければ済まない時期が来るのはもう遠い事ではなからうと思う。ペリカン丈の経験で万年筆は駄目だという僕が人から笑われるのも間もない事とすれば、僕も笑われない為に、少しは外の万年筆も試してみる必要があるだろう。現に此原稿は魯庵君が使つて見ろといつてわざわざ贈つて呉れたオノトで書いたのであるが、大変心持よくすらすら書けて愉快であつた。ペリカンを追い出した余は其姉妹に当るオノトを新らしく迎え入れて、それで万年筆に対して幾分か罪亡ぼし

をした^っ積^{もり}なのである。

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」筑摩書房

1972（昭和47）年1月10日第1刷発行

※吉田精一による底本の「解説」によれば、発表年月は、1912（明治45）年6月30日。

入力：Nana ohbe

校正：米田進

2002年5月10日作成

2005年11月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

余と万年筆

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>